

当時のあなたの恋愛は
ー成長に伴う恋愛観の変化ー

学籍番号 10100000

氏名 甲南花代

1 はじめに

恋愛とはとても楽しい世界である。人はいつでも恋をする。私達の年頃はもちろん、子供は子供なりに、そして年配になってもなお、人はその時々に関愛に真剣になるのである。一言に恋愛といっても、年齢・対象によって何らかの違ひはあるはずである。そこにある程度の法則性などが存在するのか、もしくはその時々で全く違った恋愛をするのか。ここではある一人について、これまでの自分の恋愛を振り返ることによって、人の恋愛観がどのように変化していくのかを調査しようと思う。

2 作業仮説

幼い頃は、家が近所であるとか親同士が仲良しであるとかで、子供同士も毎日のように一緒に遊んでいて、気付けば自然とその相手が“好きな子”ということになる場合が多く、成長するにつれて、内面や価値観などありとあらゆる面における総合的な相性が、相手を恋愛の対象と見るようになるにあたって大きな要素となってくる。

安らぎや楽しさをあいてと分かち合えてこそ恋愛である。しかし楽しいばかりが恋愛ではない。思春期に入る頃から、楽しさの中に苦しさや切なさといった感情が少しずつ表れてくるだろう。今回のインタビューでは、そんな微妙な部分も含めて、幼稚園から小・中・高校へと成長するにつれての恋愛の変化の過程を調査し発見する。

3 調査の概要

- ・調査期日 2001年5月14日
- ・調査対象 甲南大学文学部社会学科1回生1名。18才、女。
- ・調査方法 面接

4 インタビュー内容《チェックリスト》

- (1) 当時、好きな人はいましたか。
- (2) 相手の年齢は。
- (3) 相手との接点は。
- (4) 相手のどこに惹かれましたか。
- (5) その当時の、好きな相手との関係は。

- (6) 自分の恋愛を周りの友達に話しましたか。
- (7) 自分の恋愛を親には話しましたか。
- (8) 好きな相手はコロコロ変わる方でしたか。
- (9) 恋愛中の心境は。(楽しさ：苦しさ)

4 インタビュー結果

	幼稚園	小学校	中学校	高校
(1)	いた	いた	いた	いた
(2)	同年齢	同年齢	同年齢	同年齢
(3)	家が近所	同じクラス	ひとめぼれ	同じ部活
(4)	自分より優れているところ	外見	運動神経がいいところ	外見
(5)	家族ぐるみのつきあい	団体的なつきあい	積極的に話しかけた	一对一のつきあい
(6)	話した	すごく話した	あまり話さなかった	すごく話した
(7)	話した	すごく話した	あまり話さなかった	すごく話した
(8)	コロコロ変わった	結構変わった	小学校の頃よりは一途	とても一途
(9)	10:0	9:1	7:3	5:5

5 分析・考察

インタビュー結果を見るとどの年代でも、恋愛対象になるのは同じ学校・同じ学年の相手となっている。やはりいつの時代も自分にとって一番身近な人、毎日のように会う人に惹かれていくのは自然なことのようだ。ある特定の相手に対して恋愛感情を持ち始める要因は、成長するにつれて、顔やスタイルなどの外見的要素から、性格や雰囲気などの内面的要因へと変わっていくと予想していたが、この結果を見る限り必ずしもそうだとはいえないようだ。

子供の頃、家族ぐるみのつきあいという多少限られた世界の中で生活していると、その中である特定の一人に対して“好き”という想いが生まれることは、ごく普通の、もしくは当然のことだと言うこともできるかもしれない。しかしそうではなく、中学・高校のようなより広がった世界の中で特定の相手を好きになるということは、その全くゼロの段階から自分で見極めて選んで好きになるということに幼少時代とはまた違った大きな意味があるのだと思う。

この結果を見る限り、彼女は自分の好きな人のことを周りの友達や親に話す

ことに抵抗はないようだがある時期例外もあったようだ。中学時代である。この時期はちょうど“思春期”にあたり、自分の恋愛などを口に出すことが何故かできなくなることでもあるのである。そんな微妙な変化がこの結果にはすごくはっきり現れている。

幼い頃は、相手と過ごす時間がどれだけ長いかに関わっていて、一緒に遊んで楽しいと感じる相手に好意を抱く場合が多いので、好きな相手がコロコロ変わっていたということは、それだけ誰と遊んでいても楽しいと感じていたからだろう。しかし成長とともに恋愛は楽しいだけでなく苦しさもたくさん感じるようになってきたようである。これは、自分の楽しさだけを感じる幼児期とは違って、大人に近づくとだんだん、相手も楽しいと感じているのか、こうしたら相手はどう思うだろうなど、相手のことも考えるようになるからである。

6 結論

幼い頃は、親同士が仲が良くて、毎日一緒に遊び、物心ついた頃からいつも一緒という中で自然とその相手が“特別”な存在に感じてくるというパターンが多い。しかし、親同士の仲や家の距離などを取り払ってすべての人をその人自身・一個人として見られるようになってからこそ、本当に恋愛をしていると言えるだろう。

恋愛を通して、自分は普段相手のどこを見て人を判断するのかや、それまで知らなかった自分の考え方や行動パターンなど、あらゆる面での自己発見につながることもできるのである。

ただ楽しいだけの恋愛も、自己というものがはっきり形成されていく中で、それだけではなく苦しさや切なさも生まれてくるのである。そのすべてを経験してこそ人は恋愛によって心も成長するのである。